



CHAPTER 3

セキュリティ ソリューションの設定

この章では、無線 LAN のセキュリティ ソリューションについて説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- 「Cisco Unified Wireless Network Solution セキュリティ」 (P.3-1)
- 「WCS を使用した Cisco Unified Wireless Network Solution のレイヤ 3 モードからレイヤ 2 モード への変換」 (P.3-5)
- 「WCS に対するファイアウォールの設定」 (P.3-6)
- 「アクセス ポイント認証」 (P.3-6)
- 「Management Frame Protection (MFP)」 (P.3-7)
- 「Intrusion Detection System (IDS) の設定」 (P.3-9)
- 「IDS シグニチャの設定」 (P.3-9)
- 「Web ログインの有効化」 (P.3-17)
- 「Certificate Signing Request (CSR) の生成」 (P.3-22)

Cisco Unified Wireless Network Solution セキュリティ

Cisco Unified Wireless Network Solution は、将来的に複雑化する可能性のあるレイヤ 1、レイヤ 2、およびレイヤ 3 の 802.11 アクセス ポイントのセキュリティ コンポーネントを 1 つの単純なポリシー マネージャにまとめたもので、システム全体のセキュリティ ポリシーを無線 LAN ごとにカスタマイズできます。これにより、単純で統一された体系的なセキュリティ管理が実現します。

企業での無線 LAN 展開の最も大きな課題の 1 つが、脆弱な独立型の暗号化方式である Wired Equivalent Privacy (WEP) です。低価格なアクセス ポイントの登場も新たな問題で、企業ネットワークに接続して man-in-the-middle アタックおよび DoS 攻撃（サービス拒絶攻撃）に利用される可能性があります。また、次々に追加されるセキュリティ ソリューションの複雑さから、多くの IT マネージャが無線 LAN セキュリティの最新技術を採用することをためらっています。

レイヤ 1 ソリューション

Cisco Unified Wireless Network Solution オペレーティング システムのセキュリティ ソリューションによって、すべてのクライアントはアクセスの試行回数を、オペレータが設定した回数までに制限されます。クライアントがその制限回数内にアクセスできなかった場合、そのクライアントは、オペレータが設定したタイマーが切れるまで自動的に除外（アクセスをブロック）されます。そのオペレーティング システムは、無線 LAN ごとに SSID ブロードキャストを無効にすることもできます。

レイヤ 2 ソリューション

上位レベルのセキュリティと暗号化が必要な場合、ネットワーク管理者は、Extensible Authentication Protocol (EAP; 拡張認証プロトコル) を使用する 802.1X 動的キーや Wi-Fi Protected Access (WPA) 動的キーなど業界標準のセキュリティ ソリューションも実装できます。Cisco Unified Wireless Network Solution の WPA 実装には、Advanced Encryption Standard (AES) 動的キー、Temporal Key Integrity Protocol + Message Integrity Code Checksum (TKIP + Michael) 動的キー、または WEP 静的キーが含まれます。無効化も使用され、オペレータが設定した回数だけ認証の試行に失敗すると、自動的にレイヤ 2 アクセスがブロックされます。

どの無線セキュリティ ソリューションを採用した場合も、コントローラとアクセス ポイントとの間のすべてのレイヤ 2 有線通信は、Lightweight Access Point Protocol (LWAPP; Lightweight アクセス ポイント プロトコル) トンネルを使用してデータを渡すことにより保護されます。

レイヤ 3 ソリューション

WEP の問題の解決をさらに進めるには、Virtual Private Network (VPN; バーチャル プライベート ネットワーク) などの業界標準のレイヤ 3 セキュリティ ソリューションを使用します。

Cisco Unified Wireless Network Solution では、ローカルおよび RADIUS Media Access Control (RADIUS MAC; RADIUS メディア アクセス制御) フィルタリングがサポートされています。このフィルタリングは、802.11 アクセス カード MAC アドレスの既知のリストがある小規模のクライアント グループに適しています。Cisco Unified Wireless Network Solution は、ローカルおよび RADIUS ユーザ/パスワード認証もサポートします。この認証は、小規模から中規模のクライアント グループに適しています。

シングル ポイントでの設定ポリシー マネージャのソリューション

Cisco Unified Wireless Network Solution に WCS を装備した場合、システム全体のセキュリティ ポリシーを無線 LAN ごとに設定できます。スモール オフィス、ホーム オフィス (SOHO) のアクセス ポイントでは、アクセス ポイントごとにセキュリティ ポリシーを個別に設定する必要があります。また、複数のアクセス ポイントにわたってセキュリティ ポリシーを設定するには、サードパーティのアプリケーションを使用する必要があります。Cisco Unified Wireless Network Solution セキュリティ ポリシーは WCS からシステム全体に適用できるため、エラーを除去することができ、全体的な作業量が大幅に減少します。

不正アクセス ポイントのソリューション

この項では、不正アクセス ポイントに対するセキュリティ ソリューションについて説明します。

不正アクセス ポイントの問題

不正アクセス ポイントは、正規のクライアントをハイジャックし、プレーンテキストまたは他の DoS 攻撃や man-in-the-middle アタックを使用することによって、無線 LAN の運用を妨害します。つまり、ハッカーは不正アクセス ポイントを使用して、パスワードやユーザ名などの機密情報を取得できるのです。すると、ハッカーは一連の Clear To Send (CTS; クリア ツー センド) フレームを送信できるようになります。このフレームはアクセス ポイントを模倣し、特定の無線 LAN クライアントアダプタ

に伝送して、他のすべてのアダプタには待機するように指示します。その結果、正規のクライアントは、無線 LAN リソースに接続できなくなります。したがって、無線 LAN サービス プロバイダーは、空間からの不正アクセス ポイントの締め出しに強い関心を持っています。

オペレーティング システムのセキュリティ ソリューションでは、「不正アクセス ポイントのタグgingと阻止」の説明にあるように、Radio Resource Management (RRM) 機能を使用して、すべての近隣アクセス ポイントを継続的に監視し、不正アクセス ポイントを自動的に検出し、それらを特定します。

不正アクセス ポイントのタグgingと阻止

WCS を使用して Cisco Unified Wireless Network Solution を監視している場合、不正アクセス ポイントが検出されるとフラグが生成され、既知の不正アクセス ポイントが MAC アドレスで表示されます。オペレータは、それぞれの不正アクセス ポイントに最も近いアクセス ポイントの場所を示すマップを表示できます。その後、それらを **Known** または **Acknowledged** 不正アクセス ポイントとしてマークする（追加の処置はなし）、それらを **Alert** 不正アクセス ポイントとしてマークする（監視し、アクティブになったときに通知）、それらを **Contained** 不正アクセス ポイントとしてマークする（1 つから 4 つのアクセス ポイントに対して、不正アクセス ポイントのクライアントが不正アクセス ポイントとアソシエートするたびにそれらのクライアントに認証解除とアソシエート解除のメッセージを送信することによって阻止する）のいずれかを実行します。

不正アクセス ポイントの管理

WCS の不正アクセス ポイント管理の対象は、不正アクセス ポイントとアドホックの不正アクセス ポイントです。WCS の [Home] ウィンドウから [Security] タブをクリックすると、最新のアドホックの不正アクセス ポイントを表示できます。

最新のアドホックの不正アクセス ポイント

[Most Recent Rogue Adhocs] に、アドホックの不正アクセス ポイントの MAC アドレス、SSID、ステート、および最初の検出日時が表示されます。



(注)

コントローラで最初にスキャンされたときは、アドホックの不正なアクセス ポイントのステートが「Alert」と表示され、OS の ID を確認中の場合は、「Pending」と表示されます。

ステップ 1 特定のアドホックの不正アクセス ポイントの [MAC Address] をクリックし、アソシエートされているアラームの詳細を表示します。

ステップ 2 アラームを変更するには、[Select a Command] ドロップダウン メニューから次のコマンドのいずれかを選択し、[GO] をクリックします。

- Assign to me : 選択されたアラームを現在のユーザに割り当てます。
- Unassign : 選択されたアラームの割り当てを解除します。
- Delete : 選択されたアラームを削除します。
- Clear : 選択されたアラームをクリアします。
- Acknowledge : アラームを認識済みに指定できます。



(注)

アラームを認識済みとしてマークすると、[Alarm Summary] ウィンドウには表示されなくなります。

- Unacknowledge : 認識済みアラームを未認識アラームに戻します。
- Event History : アドホックの不正アクセス ポイントのアラームのイベントを表示できます。



(注) このアドホックの Event History は、[Most Recent Rogue Adhocs] 詳細ページからも開くことができます。

- Detecting APs : アドホックの不正アクセス ポイントを現在検出しているアクセス ポイントを表示できます。
- Map (High Resolution) : 計算されたアドホックの不正アクセス ポイントの現在位置を [Maps > Building Name > Floor Name] ページに表示します。
- Rogue Clients : このアドホックの不正アクセス ポイントにアソシエートしているクライアントを表示できます。
- Set State to 'Unknown - Alert' : アドホックの不正アクセス ポイントを最も低い脅威としてタグ付けしてアドホックの不正アクセス ポイントの監視を継続し、阻止機能をオフにします。
- Set State to 'Known - Internal' : アドホックの不正アクセス ポイントを内部としてタグ付けして既知のアドホックの不正アクセス ポイント リストに追加し、阻止機能をオフにします。
- Set State to 'Known - External' : アドホックの不正アクセス ポイントを外部としてタグ付けして既知のアドホックの不正アクセス ポイント リストに追加し、阻止機能をオフにします。
- 1 AP Containment ~ 4 AP Containment : 不正な機器の近辺にあるアクセス ポイント数 (1 ~ 4) を示し、その不正な機器にアソシエートされたクライアント デバイスに認証解除とアソシエート解除のメッセージを送信します。

統合されたセキュリティ ソリューション

Cisco Unified Wireless Network Solution では、次の統合されたセキュリティ ソリューションも用意されています。

- Cisco Unified Wireless Network Solution オペレーティング システムのセキュリティは、堅牢な 802.1X AAA (認証、認可、アカウントング) エンジンを中心に構築されており、オペレータは、Cisco Unified Wireless Network Solution 全体にわたってさまざまなセキュリティ ポリシーを迅速に設定および適用できます。
- コントローラおよびアクセス ポイントには、システム全体の認証および認可プロトコルがすべてのポートおよびインターフェイスに装備され、最大限のシステム セキュリティが実現されています。
- オペレーティング システムのセキュリティ ポリシーは個別の無線 LAN に割り当てられ、アクセス ポイントは設定されたすべての無線 LAN (最大 16) に同時にブロードキャストします。このポリシーにより、干渉の増加やシステム スループットの低下が発生する可能性のある、アクセス ポイントの追加が不要になる場合があります。
- オペレーティング システムのセキュリティは、RRM 機能を使用して、干渉およびセキュリティ 侵犯がないか継続的に空間を監視し、それらを検出したときはオペレータに通知します。
- オペレーティング システムのセキュリティは、業界標準の AAA サーバで動作し、システム統合が単純で簡単です。
- Cisco Intrusion Detection System (CIDS; シスコ侵入検知システム) /Intrusion Protection System (IPS; 侵入防御システム) は、特定のクライアントに影響を及ぼす攻撃を検出すると、コントローラにそれらのクライアントの無線ネットワークへのアクセスをブロックするように指示します。

- オペレーティング システムのセキュリティ ソリューションは、通常、高い処理能力を必要とする、包括的なレイヤ 2 およびレイヤ 3 の暗号化アルゴリズムを実現します。コントローラに VPN/拡張セキュリティ モジュールを装備することで、高度なセキュリティ設定に必要なハードウェアとしての機能も実現でき、暗号化を別のサーバで行う必要はありません。

WCS を使用した Cisco Unified Wireless Network Solution のレイヤ 3 モードからレイヤ 2 モードへの変換

WCS ユーザ インターフェイスを使用して Cisco Unified Wireless Network Solution をレイヤ 3 モードからレイヤ 2 LWAPP 転送モードに変換する手順は、次のとおりです。



(注) IOS ベースの Lightweight アクセス ポイントでは、レイヤ 2 LWAPP モードはサポートされません。このようなアクセス ポイントは、レイヤ 3 でしか実行できません。



(注) この手順を実行すると、コントローラが再度ブートしてアクセス ポイントがコントローラと再アソシエートするまで、アクセス ポイントはオフラインになります。

ステップ 1 コントローラとアクセス ポイントがすべて同じサブネット上に配置されていることを確認します。



(注) 変換を実行する前に、コントローラおよびアソシエートしているアクセス ポイントをレイヤ 2 モードで動作するように設定する必要があります。

ステップ 2 WCS ユーザ インターフェイスにログインします。LWAPP 転送モードをレイヤ 3 からレイヤ 2 に変換する手順は、次のとおりです。

- [Configure] > [Controllers] の順にクリックし、[All Controllers] ページに移動します。
- 目的のコントローラの IP アドレスをクリックして、[IP Address > Controller Properties] ページを表示します。
- サイドバーで、[System] > [General] の順にクリックして、[IP Address > General] ページを表示します。
- LWAPP 転送モードを [Layer2] に変更し、[Save] をクリックします。
- WCS で次のメッセージが表示された場合、[OK] をクリックします。

Please reboot the system for the LWAPP Mode change to take effect.

ステップ 3 Cisco Unified Wireless Network Solution を再起動する手順は、次のとおりです。

- [IP Address > Controller Properties] ページに戻ります。
- [System] > [Commands] の順にクリックして、[IP Address > Controller Commands] ページを表示します。
- [Administrative Commands] の下で、[Save Config To Flash] を選択し [GO] をクリックして、変更した設定をコントローラに保存します。
- [OK] をクリックして、次に進みます。
- [Administrative Commands] の下で、[Reboot] を選択し [GO] をクリックして、コントローラをリブートします。

- f. [OK] をクリックし、保存して再度ブートすることを確認します。
- ステップ 4** コントローラが再度ブートした後で LWAPP 転送モードがレイヤ 2 になっていることを確認する手順は、次のとおりです。
- [Monitor] > [Devices] > [Controllers] の順にクリックし、[Controllers > Search Results] ページに移動します。
 - 目的のコントローラの IP アドレスをクリックして、[Controllers > IP Address > Summary] ページを表示します。
 - [General] の下で、現在の LWAPP 転送モードが [Layer2] になっていることを確認します。
- これで、レイヤ 3 からレイヤ 2 への LWAPP 転送モードの変換が完了しました。オペレーティングシステムのソフトウェアによって、同じサブネット上のコントローラとアクセス ポイントとの間におけるすべての通信が制御されます。

WCS に対するファイアウォールの設定

WCS サーバと WCS ユーザ インターフェイスがファイアウォールの同じ側でない場合、ファイアウォール上の次のポートが双方向のトラフィックに対してオープンになっていない限り、これらは通信できません。

- 80 (初期 HTTP 用)
- ポート 69 (TFTP)
- ポート 162 (トラップ)
- ポート 443 (HTTPS)

これらのポートをオープンにして、WCS サーバと WCS ユーザ インターフェイスとの間の通信を許可するようにファイアウォールを設定します。

アクセス ポイント認証

アクセス ポイントが認証に使用する証明書の種類に応じて、認可済みアクセス ポイントの一覧を表示できます。

- ステップ 1** [Configure] > [Controllers] の順に選択します。
- ステップ 2** [IP Address] 列で URL の 1 つをクリックします。
- ステップ 3** 左側のサイドバーのメニューから [Security] > [AP Authorization] の順に選択します。
- ステップ 4** ウィンドウの [AP Policies] 部分に、アクセス ポイントの認証が有効かどうかが表示されます。また、自己署名証明書 (SSC AP) の承認が有効かどうかも表示されます。通常は、アクセス ポイントは AAA または証明書によって認証されます (SSC は 4400 コントローラおよび 200 コントローラのみを使用)。
これらの値を変更するには、[Select a Command] ドロップダウン メニューから [Edit AP Policies] を選択し、[GO] をクリックします。
- ステップ 5** [AP Authorization List] 部分にアクセス ポイントの無線 MAC アドレス、証明書の種類、およびキー ハッシュが表示されます。別の認証エントリを追加するには、[Select a Command] ドロップダウン メニューから [Add AP Auth Entry] を選択し、[GO] をクリックします。

- ステップ 6** ドロップダウンメニューからこのコントローラに適用するテンプレートを選択して [Apply] をクリックします。アクセスポイント認証の新しいテンプレートを作成するには、[click here] をクリックします。テンプレート作成ページにリダイレクトされます。新しいテンプレートの作成手順については、「[アクセスポイント認証または LBS 認証の設定](#)」(P.11-40) を参照してください。

Management Frame Protection (MFP)

Management Frame Protection (MFP) は、アクセスポイントとクライアント間で受け渡される、無防備の 802.11 管理メッセージと暗号化されていない 802.11 管理メッセージにセキュリティを提供します。MFP では、インフラストラクチャとクライアントの両方がサポートされます。WCS ソフトウェアリリース 4.0 ではインフラストラクチャ MFP だけがサポートされている一方で、WCS ソフトウェアリリース 4.1 以降では、インフラストラクチャとクライアント MFP の両方がサポートされています。

- **インフラストラクチャ MFP** : 敵対者を発見することにより、管理フレームを保護します。敵対者は、DoS 攻撃を引き起こし、アソシエーションおよびプローブでネットワークを氾濫させ、不正アクセスポイントをさしはさみ、QoS および無線測定フレームを攻撃してネットワークパフォーマンスに影響を与えます。また、フィッシングインシデントを検出して報告するために迅速かつ効果的な手段が用意されています。

特に、インフラストラクチャ MFP では、アクセスポイントによって送信される管理フレームに Message Integrity Check Information Element (MIC IE) を追加して、802.11 セッション管理機能を保護します。Message Integrity Check Information Element (MIC IE) はその後ネットワーク内のその他のアクセスポイントにより検証されます。インフラストラクチャ MFP は、受動です。侵入を感知して報告できますが、侵入を阻止する手段がありません。

- **クライアント MFP** : スプーフされたフレームから認可済みクライアントを保護するので、無線 LAN に対する一般的な攻撃の多くが効果的でなくなります。認証解除などの攻撃の場合、単純に、有効なクライアントと競合させることによって、そのパフォーマンスを低下させます。

特に、アクセスポイントとクライアントの両方が、スプーフされたクラス 3 管理フレーム（つまり、認証済みでアソシエートが完了しているアクセスポイントとクライアント間で受け渡される管理フレーム）をドロップして予防措置を講じることができるよう、クライアント MFP ではアクセスポイントと Cisco Compatible Extension クライアント間で送信される管理フレームが暗号化されます。クライアント MFP では、クラス 3 ユニキャスト管理フレーム（アソシエーション解除、認証解除、および QoS (WMM) アクション）を保護するために、IEEE 802.11i で定義されるセキュリティメカニズムを利用します。クライアント MFP はアクティブです。最も一般的な DoS 攻撃から、クライアントとアクセスポイントとのセッションを保護できます。セッションのデータフレームで使用されるのと同じ暗号化方式を使用することにより、クラス 3 管理フレームを保護します。アクセスポイントまたはクライアントによって受信されるフレームを復号化できない場合、フレームはドロップされ、このイベントがコントローラに報告されます。

クライアント MFP を使用するには、クライアントは Cisco Compatible Extensions (バージョン 5) MFP をサポートしている必要があります。TKIP または AES-CCMP のいずれかを使用する WPA2 をネゴシエートする必要があります。PMK を取得するために、EAP または PSK を使用できます。アクセスポイント間、またはレイヤ 2 とレイヤ 3 の高速ローミングでセッションキーを配信するために、CCKM およびコントローラ モビリティ管理が使用されます。

ブロードキャストフレームに対する攻撃を防ぐために、Cisco Compatible Extensions (バージョン 5) をサポートしているアクセスポイントは、ブロードキャストクラス 3 管理フレーム（アソシエーション解除、認証解除、またはアクションなど）を送信しません。Compatible Extensions クライアント（バージョン 5）とアクセスポイントは、ブロードキャストクラス 3 管理フレームを破棄します。

クライアント MFP は、インフラストラクチャ MFP を置き換えるのではなく、補足します。これは、インフラストラクチャ MFP が、無効なクラス 1 管理フレームとクラス 2 管理フレームだけでなく、クライアント MFP 対応ではないクライアントに送信される無効なユニキャスト フレームを検出して報告し続けるためです。インフラストラクチャ MFP は、クライアント MFP によって保護されていない管理フレームにだけ適用されます。

インフラストラクチャ MFP は、次の 3 つの主要なコンポーネントで構成されています。

- **管理フレーム保護**：アクセス ポイントは、各フレームに MIC IE を追加することにより、送信する管理フレームを保護します。フレームのコピー、変更、または再生を試みると、MIC が無効となり、MFP フレームを検出するように設定された受信アクセス ポイントはその矛盾を報告します。
- **管理フレーム検証**：インフラストラクチャ MFP でアクセス ポイントは、ネットワーク内の他のアクセス ポイントから受信するすべての管理フレームを検証します。これにより、MC IE が存在し（発信側が MFP フレームを送信するよう設定されている場合）、管理フレームの中身が一致していることを確認できます。MFP フレームを送信するよう設定されているアクセス ポイントに属する BSSID から有効な MIC IE が含まれていないフレームを受信した場合は、その矛盾がネットワーク管理システムに報告されます。タイムスタンプが適切に機能するには、すべてのコントローラで Network Time Protocol (NTP; ネットワーク タイム プロトコル) が同期されている必要があります。
- **イベント報告**：アクセス ポイントは異常を検出するとコントローラに通知し、コントローラは受信した異常イベントを集積して、SNMP トラップ経由でネットワーク管理システムに結果を報告します。



(注)

クライアント MFP は、インフラストラクチャ MFP と同じイベント報告メカニズムを使用します。

インフラストラクチャ MFP はデフォルトで有効となり、グローバルに無効にできます。以前のソフトウェア リリースからアップグレードするときに、アクセス ポイント認証が有効にされている場合、インフラストラクチャ MFP はグローバルに無効にされます。これは、2 つの機能が相互に排他的であるためです。インフラストラクチャ MFP がグローバルに有効にされている場合、選択した WLAN に対してシグニチャ生成（送信フレームへの MIC の追加）を無効にし、選択したアクセス ポイントに対して検証を無効にできます。

WLAN テンプレートで MFP を設定します。「[WLAN テンプレートの設定](#)」(P.11-9) を参照してください。

MFP の使用に関するガイドライン

MFP の使用に関するガイドラインは、次のとおりです。

- MFP では、1500 シリーズのメッシュ アクセス ポイントを除く、Cisco Aironet Lightweight アクセス ポイントの使用がサポートされています。
- Lightweight アクセス ポイントは、ローカル モードとモニタ モードでインフラストラクチャ MFP をサポートし、アクセス ポイントがコントローラに接続されているときには REAP モードとハイブリッド REAP モードをサポートします。ローカル モードではクライアント MFP をサポートし、ブリッジ モードではハイブリッド REAP モードをサポートします。
- クライアント MFP は、TKIP または AES-CCMP で WPA2 を使用する Cisco Compatible Extensions (バージョン 5) クライアントでだけ使用がサポートされています。
- Cisco Compatible Extensions (バージョン 5) 以外のクライアントは、クライアント MFP が無効になっているかオプションの場合に、WLAN にアソシエートできます。

Intrusion Detection System (IDS) の設定

Cisco Intrusion Detection System (CIDS; シスコ侵入検知システム) /Intrusion Protection System (IPS; 侵入防御システム) は、特定のクライアントに影響を及ぼす攻撃を検出すると、コントローラにそれらのクライアントの無線ネットワークへのアクセスをブロックするように指示します。このシステムにより、ワーム、スパイウェア/アドウェア、ネットワーク ウィルス、およびアプリケーションの不正使用などの脅威を検出し、分類し、阻止するための重要なネットワーク保護を実現できます。IDS で攻撃の検出に使用できる方法は 2 つあります。

- IDS センサー (レイヤ 3 用)
- IDS シグニチャ (レイヤ 2 用)

IDS センサーの表示

センサーが攻撃を識別した場合は、攻撃しているクライアントを回避するようにコントローラに警告します。新しい IDS センサーを追加した場合は、回避したクライアントのレポートをセンサーがコントローラに送信できるように、コントローラをその IDS センサーに登録します。また、コントローラは定期的にセンサーをポーリングします。

IDS センサーを表示する手順は、次のとおりです。

-
- ステップ 1** [Configure] > [Controllers] の順に選択します。
- ステップ 2** IP アドレスをクリックしてコントローラを選択します。
- ステップ 3** 左側のサイドバーのメニューから [Security] > [IDS Sensor Lists] の順に選択します。[IDS Sensor] ウィンドウが表示されます。このページには、このコントローラに設定されているすべての IDS センサーが一覧表示されます。
-

IDS シグニチャの設定

IDS シグニチャ (受信する 802.11 パケットのさまざまな種類の攻撃の識別に使用する、ビットパターンのマッチングルール) はコントローラで設定できます。シグニチャが有効になっている場合は、コントローラに接続されたアクセス ポイントは受信した 802.11 データまたは管理フレームにおいてシグニチャ分析を実行し、矛盾をコントローラへ報告します。攻撃が検出されると、適切な緩和措置が取られます。

シスコでは、標準シグニチャとカスタムなシグニチャのページで示すように、コントローラで 17 個の標準シグニチャをサポートします (図 3-1 を参照してください)。

図 3-1 [Standard Signature] ウィンドウ

Wireless Control System
Username: root | Logout | Refresh | Print View

172.19.28.40 > Standard Signature Parameters

Check For Standard Signatures Enable

Precedence	Name	Frame Type	Action	State	Description
1	Bcast deauth	Management	Report	Enabled	Broadcast Deauthentication Frame
2	NULL probe resp 1	Management	Report	Enabled	NULL Probe Response - Zero length SSID element
3	NULL probe resp 2	Management	Report	Enabled	NULL Probe Response - No SSID element
4	Assoc flood	Management	Report	Enabled	Association Request flood
5	Auth flood	Management	Report	Enabled	Authentication Request flood
6	Reassoc flood	Management	Report	Enabled	Reassociation Request flood
7	Broadcast Probe floo	Management	Report	Enabled	Broadcast Probe Request flood
8	Disassoc flood	Management	Report	Enabled	Disassociation flood
9	Deauth flood	Management	Report	Enabled	Deauthentication flood
10	Reserved mgmt 7	Management	Report	Enabled	Reserved management sub-type 7
11	Reserved mgmt F	Management	Report	Enabled	Reserved management sub-type F
12	EAPOL flood	Data	Report	Enabled	EAPOL Flood Attack
13	NetStumbler 3.2.0	Data	Report	Enabled	NetStumbler 3.2.0
14	NetStumbler 3.2.3	Data	Report	Enabled	NetStumbler 3.2.3
15	NetStumbler 3.3.0	Data	Report	Enabled	NetStumbler 3.3.0
16	NetStumbler generic	Data	Report	Enabled	NetStumbler
17	Wellenreiter	Management	Report	Enabled	Wellenreiter

Alarm Summary

Malicious AP	0	0	379
Coverage Hole	0	0	0
Security	3	0	0
Controllers	0	0	2
Access Points	6	0	0
Location	0	0	0
Mesh Links	0	0	0
WCS	0	0	0

これらのシグニチャは主に 6 つのグループに分けられます。最初の 4 つのグループには管理シグニチャが含まれ、最後の 2 つのグループにはデータ シグニチャが含まれます。

- **ブロードキャスト認証解除フレーム シグニチャ**：ブロードキャスト認証解除フレーム攻撃の際に、ハッカーが 802.11 認証解除フレームを別のクライアントのブロードキャスト MAC アドレスに送信します。この攻撃によって、送信先クライアントがアクセス ポイントからアソシエーション解除され、その接続が失われます。この行為が繰り返されると、クライアントが DoS を受けることとなります。ブロードキャスト認証解除フレーム シグニチャ（優先 1）を使用してこれらの攻撃を検出すると、アクセス ポイントは、シグニチャの特性に一致するブロードキャスト認証解除フレームを送信するクライアントをリッスンします。アクセス ポイントがこうした攻撃を検出すると、コントローラに警告します。システムの設定に応じて、攻撃しているデバイスの信号が認証されたクライアントを干渉しないように封じ込めるか、またはコントローラが即時アラートをシステム管理者に転送してそれ以降の操作を止めるかのいずれかまたは両方の措置が取られます。
- **NULL プローブ応答シグニチャ**：NULL プローブの応答攻撃の際、ハッカーが NULL プローブ応答を無線クライアント アダプタに送信します。結果としてクライアント アダプタがロックされます。NULL プローブ応答シグニチャによってこうした攻撃が検出されると、アクセス ポイントは、無線クライアントを特定してコントローラに警告します。NULL プローブ応答シグニチャには次が含まれます。
 - NULL プローブ応答 1（優先 2）
 - NULL プローブ応答 2（優先 3）
- **管理フレームフラッドシグニチャ**：管理フレームフラッド攻撃の際、ハッカーが 802.11 管理フレームを使用してアクセス ポイントをフラッドさせます。結果は、アクセス ポイントにアソシエートされたすべてのクライアントまたはアクセス ポイントへのアソシエートを試みているすべてのクライアントで DoS となります。この攻撃は、別の種類の管理フレーム、つまり、アソシエーション要求、認証要求、再アソシエーション要求、プローブ要求、アソシエーション解除要求、認証解除要求、予約済み管理のサブタイプでも実行されることがあります。

管理フレームフラッドシグニチャによってこれらの攻撃を検出すると、アクセスポイントは、シグニチャの全体的な特性と合致する管理フレームを特定します。こうしたフレームの頻度がシグニチャで設定した値を超えている場合、これらのフレームをリッスンしたアクセスポイントがアラームをトリガーします。コントローラがトラップを生成して、WCS に転送します。

管理フレームフラッドシグニチャには次のものが含まれます。

- アソシエーションフラッド (優先 4)
- 認証フラッド (優先 5)
- 再アソシエーションフラッド (優先 6)
- ブロードキャストプローブフラッド (優先 7)
- アソシエーション解除フラッド (優先 8)
- 認証解除フラッド (優先 9)
- 予約済み管理 7 (優先 10)
- 予約済み管理 F (優先 11)

予約済み管理フレームシグニチャの 7 と F は、将来の使用のために予約されています。

- **Wellenreiter** シグニチャ: **Wellenreiter** は無線 LAN のスキャンおよび検出のユーティリティで、アクセスポイントとクライアント情報を表示させることができます。**Wellenreiter** シグニチャ (優先 17) によってこうした攻撃を検出すると、アクセスポイントは攻撃しているデバイスを特定し、コントローラに警告します。
- **EAPOL** フラッドシグニチャ: **EAPOL** フラッドアタックの際、ハッカーは、802.1X 認証要求を含む **EAPOL** フレームを使用して無線をフラッドさせます。その結果、802.1X 認証サーバは、要求のすべてに回答できなくなり、成功した認証の応答を正規のクライアントに送信できなくなります。結果は、すべての影響するクライアントに対して **DoS** となります。**EAPOL** フラッドシグニチャ (優先 12) によってこうした攻撃を検出すると、アクセスポイントは **EAPOL** パケットが許可する最大数を超えるまで待機します。その後、コントローラに警告され、適切な緩和措置が取られます。
- **NetStumbler** シグニチャ: **NetStumbler** は無線 LAN スキャンユーティリティで、アクセスポイントのブロードキャスト情報 (たとえば、動作チャネル、RSSI 情報、アダプタメーカー名、SSID、WEP ステータス、GPS が付いているときには **NetStumbler** を実行しているデバイスの緯度と軽度) をレポートします。**NetStumbler** で認証が成功し、アクセスポイントにアソシエートされると、**NetStumbler** のバージョンに応じて、次の文字列を含むデータフレームが送信されます。

表 3-1 NetStumbler バージョン

バージョン	文字列
3.2.0	「Flurble gronk bloopit, bnip Frundletrune」
3.2.3	「All your 802.11b are belong to us」
3.3.0	空白スペースを送信

NetStumbler シグニチャによってこうした攻撃を検出すると、アクセスポイントは攻撃しているデバイスを特定し、コントローラに警告します。**NetStumbler** シグニチャには次のものが含まれます。

- **NetStumbler** 3.2.0 (優先 13)
- **NetStumbler** 3.2.3 (優先 14)
- **NetStumbler** 3.3.0 (優先 15)
- **NetStumbler** 一般 (優先 16)

シグニチャの設定方法は、次のとおりです。

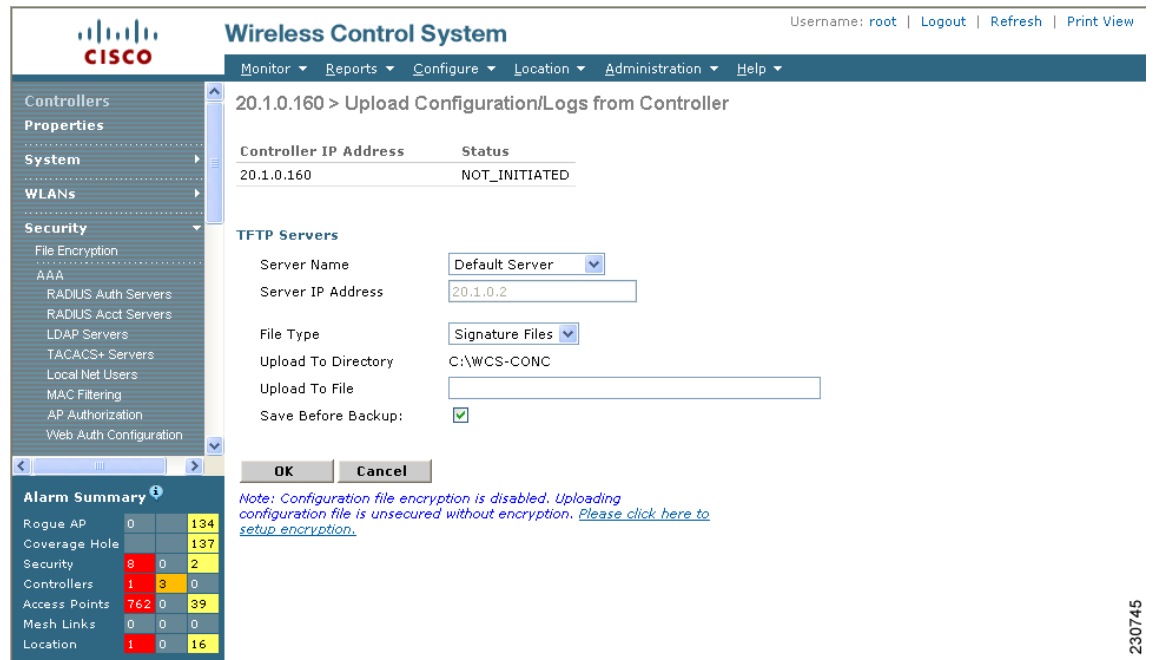
- 「IDS シグニチャのアップロード」 (P.3-12)
- 「IDS シグニチャのダウンロード」 (P.3-13)
- 「DS シグニチャの有効化または無効化」 (P.3-14)
- 「IDS シグニチャのイベントの表示」 (P.3-17)

IDS シグニチャのアップロード

コントローラから IDS シグニチャをアップロードする手順は、次のとおりです。

-
- ステップ 1** シスコからシグニチャ ファイルを入手します (以降、標準シグニチャ ファイル)。「IDS シグニチャのダウンロード」 (P.3-13) に従い、独自のシグニチャ ファイル (カスタム シグニチャ ファイル) を作成することもできます。
- ステップ 2** シグニチャのダウンロードに Trivial File Transfer Protocol (TFTP; 簡易ファイル転送プロトコル) サーバを使用できることを確認します。TFTP サーバをセットアップするときのガイドラインは、次のとおりです。
- サービス ポート経由でダウンロードする場合、サービス ポートはルーティングできないため、TFTP サーバはサービス ポートと同じサブネット上になければなりません。
 - ディストリビューション システム ネットワーク ポート経由でダウンロードする場合、ディストリビューション システム ポートはルーティング可能なので、TFTP サーバはディストリビューション システム ネットワーク ポートと同じサブネットでも異なるサブネットでもかまいません。
 - Cisco WCS の組み込み TFTP サーバとサードパーティの TFTP サーバは同じ通信ポートを使用するため、サードパーティの TFTP サーバは WCS と同じコンピュータ上で実行できません。
- ステップ 3** [Configure] > [Controllers] の順に選択します。
- ステップ 4** IP アドレスをクリックしてコントローラを選択します。
- ステップ 5** 左側のサイドバーのメニューから [Security] を選択し、[Standard Signatures] または [Custom Signatures] を選択します。
- ステップ 6** [Select a Command] ドロップダウン メニューから、[Upload Signature Files from Controller] を選択します。図 3-2 は表示されるウィンドウを示しています。

図 3-2 シグニチャ ファイルのアップロード



230745

- ステップ 7** 転送に使用している TFTP サーバ名を指定します。
- ステップ 8** TFTP サーバが新しい場合は、[Server IP Address] パラメータで TFTP IP アドレスを入力します。
- ステップ 9** [File Type] ドロップダウンメニューから [Signature Files] を選択します。
- ステップ 10** このシグニチャ ファイルは、TFTP サーバによる使用に対して設定されたルート ディレクトリにアップロードされます。[Upload to File] パラメータで別のディレクトリに変更できます (このパラメータは、[Server Name] が「Default Server」の場合のみ表示)。コントローラはベース ネームとしてこのローカル ファイル名を使用し、標準シグニチャ ファイルの拡張子として「_std.sig」を、カスタムシグニチャ ファイルの拡張子として「_custom.sig」を追加します。
- ステップ 11** [OK] をクリックします。

IDS シグニチャのダウンロード

標準のシグニチャ ファイルが既にコントローラ上にあり、カスタマイズされたシグニチャをダウンロードする場合は、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Configure] > [Controllers] の順に選択します。
- ステップ 2** IP アドレスをクリックしてコントローラを選択します。
- ステップ 3** [System] > [Commands] の順に選択します。
- ステップ 4** [Upload/Download Commands] ドロップダウンメニューから、[Download IDS Signatures] を選択し、[GO] をクリックします。
- ステップ 5** シグニチャ ファイル (*.sig) を TFTP サーバ上のデフォルトディレクトリにコピーします。
- ステップ 6** [File is Located On] パラメータから [local machine] を選択します。ファイル名および、サーバのルートディレクトリに対して相対的なパスがわかる場合は、TFTP サーバを選択することもできます。

- ステップ 7** [Maximum Retries] パラメータに、シグニチャ ファイルのダウンロードを試みる最大時間を入力します。
- ステップ 8** [Timeout] パラメータに、シグニチャ ファイルをダウンロードする際、コントローラがタイムアウトするまでの最大時間を秒単位で入力します。
- ステップ 9** シグニチャ ファイルは c:\tftp ディレクトリにアップロードされます。そのディレクトリでのローカル ファイル名を指定し、[Browse] ボタンを使用してそのファイル名に移動します。シグニチャ ファイルの「revision」行で、ファイルがシスコ提供の標準のシグニチャ ファイルか、またはサイトに合わせたカスタム シグニチャ ファイルかを指定します（カスタム シグニチャ ファイルには revision=custom が必須）。
- ステップ 10** 何らかの理由で転送がタイムアウトした場合には、[File Is Located On] パラメータの TFTP サーバ オプションを選択すると、[Server File Name] が読み込まれ、再試行されます。ローカル マシン オプションでは 2 段階の動作が起動されます。まず、ローカル ファイルは管理者のワークステーションから WCS 自体の組み込み TFTP サーバにコピーされます。次にコントローラがそのファイルを取得します。後の動作のため、ファイルはすでに WCS サーバの TFTP ディレクトリに配置され、ここでダウンロード Web ページが自動的にファイル名を読み込みます。
- ステップ 11** [OK] をクリックします。
-

DS シグニチャの有効化または無効化

IDS シグニチャを有効化または無効化する手順は、次のとおりです。

- ステップ 1** [Configure] > [Controllers] の順に選択します。
- ステップ 2** IP アドレスをクリックしてコントローラを選択します。
- ステップ 3** 左側のサイドバーのメニューから [Security] を選択し、[Standard Signatures] または [Custom Signatures] を選択します。図 3-3 は表示される画面のサンプルを示しています。

図 3-3 標準シグニチャの確認

230743

ステップ 4 個々のシグニチャを有効または無効にするには、有効または無効にしたい攻撃の種類の名前 [Name] 列をクリックします。図 3-4 は詳細シグニチャ画面のサンプルを示しています

[Standard Signature Parameters] ウィンドウには、現在コントローラ上にあるシスコ提供のシグニチャの一覧が表示されます。[Custom Signatures] ウィンドウには、現在コントローラ上にあるユーザ指定のシグニチャの一覧が表示されます。シグニチャ ウィンドウまたは詳細シグニチャ ウィンドウに次の情報が表示されます。

- **Precedence** : コントローラがシグニチャ チェックを実行する順序または優先順位
- **Name** : シグニチャによって検出を試みる攻撃の種類
- **Description** : シグニチャによって検出を試みる攻撃の種類についての詳細説明
- **Frame Type** : シグニチャによってセキュリティ攻撃を探す管理フレームまたはデータ フレームの種類
- **Action** : シグニチャによって攻撃が検出されたときに実行する、コントローラへの指示。なにも処置をとらない場合は *None*、検出を報告する場合は *Report* となります。
- **Frequency** : シグニチャの頻度。攻撃が検出される前に、アクセス ポイント レベルの検出において識別する必要がある、間隔ごとのシグニチャと一致するパケット数です。有効な範囲は間隔あたり 1 ~ 32,000 パケットです。デフォルト値は間隔あたり 50 パケットです。
- **Quiet Time** : 個々のアクセス ポイント レベルで攻撃が検出されなくなってからアラームを停止するまでの時間の長さ (秒)。この時間は MAC 情報がすべてまたは両方ある場合にだけ表示されます。有効な範囲は 60 ~ 32,000 秒で、デフォルト値は 300 秒です。
- **MAC Information** : アクセス ポイント レベルの検出においてシグニチャをネットワークごとまたは MAC アドレスごと、または両方で追跡するかどうか。
- **MAC Frequency** : シグニチャの MAC 頻度。攻撃が検出される前に、コントローラ レベルにおいて識別する必要がある、間隔ごとのシグニチャと一致するパケット数です。有効な範囲は間隔あたり 1 ~ 32,000 パケットです。デフォルト値は間隔あたり 30 パケットです。

- **Interval** : 間隔 (秒) を入力します。シグニチャの頻度しきい値への到達は設定された間隔以内に行われます。有効な範囲は 1 ~ 3600 秒で、デフォルト値は 1 秒です。
- **Enable** : このチェックボックスをオンにすると、このシグニチャでセキュリティ攻撃を検出できます。オフにするとこのシグニチャが無効になります。
- **Signature Patterns** : セキュリティ攻撃の検出に使用するパターン

図 3-4 標準シグニチャ

The screenshot shows the 'Standard Signature' configuration page in the Cisco WCS interface. The page title is 'Wireless Control System' and the user is logged in as 'root'. The breadcrumb path is '172.19.28.38 > Standard Signature'. On the left, there is an 'Alarm Summary' table with the following data:

Category	Count 1	Count 2	Count 3
Rogue AP	0	0	550
Coverage Hole	0	0	0
Security	0	0	0
Controllers	0	0	3
Access Points	2	0	1
Location	0	0	0
Mesh Links	0	0	0
WCS	0	0	0

The main configuration area includes the following parameters:

- Precedence: 4
- Name: Assoc flood
- Description: Association Request flood
- Frame Type: Management
- Action: Report
- Frequency (pkts/sec): 50
- Quiet Time (secs): 600
- MAC Information: Both
- MAC Frequency (pkts/sec): 30
- Interval: 0
- Enable: Yes

Below the parameters is the 'Signature Patterns' section with the following table:

Offset	Pattern	Offset Relative To	Mask
0	0x0000	StartFrame	0x00ff

At the bottom of the table are 'Save' and 'Audit' buttons.

- ステップ 5** [Enable] ドロップダウンメニューで、[yes] を選択します。カスタマイズされたシグニチャをダウンロードしているため、_custom.sgi という名前のファイルを有効にし、同じ名前と異なる拡張子を持つ標準シグニチャを無効にする必要があります (たとえば、ブロードキャストプローブの大量送信をカスタマイズしている場合に、ブロードキャストプローブの大量送信を標準シグニチャでは無効にしたいがカスタムシグニチャでは有効にしたい場合がある)。
- ステップ 6** コントローラの現在の標準シグニチャとカスタムシグニチャをすべて有効にするには、[Select a Command] ドロップダウンリストから [Edit Signature Parameters] (図 3-3 の画面) を選択し、[GO] をクリックします。[Global Settings for Standard and Custom Signature] ウィンドウが表示されます (図 3-5 を参照)。

図 3-5 標準シグニチャとカスタム シグニチャのグローバル設定

ステップ 7 [Enable Check for All Standard and Custom Signatures] チェックボックスをオンにします。これにより、ステップ 5 で個々に選択して有効にしたシグニチャすべてを有効にします。このチェックボックスをオフのままにすると、前にステップ 5 で有効にしても、すべてのファイルは無効になります。シグニチャが有効になっている場合は、コントローラに接続されたアクセス ポイントは受信した 802.11 データまたは管理フレームにおいてシグニチャ分析を実行し、矛盾をコントローラへ報告します。

ステップ 8 [Save] をクリックします。

IDS シグニチャのイベントの表示

有効なシグニチャに検出された攻撃の数を確認する手順は、次のとおりです。

ステップ 1 [Monitor] > [Events] または [Monitor] > [Alarms] の順に選択します。

ステップ 2 左側のサイドバーの [Event Category] ドロップダウン メニューから、[Security] を選択し、[Search] をクリックします。

Web ログインの有効化

Web 認証により、ゲストはブラウザを起動すると自動的に Web 認証ページにリダイレクトされます。ゲストは、この Web ポータルから WLAN にアクセスできます。この認証メカニズムを使用している無線 LAN 管理者は、ゲスト ユーザによるアクセスに対して、暗号化通信と非暗号化通信のどちらを設定するかを選択できます。ゲスト ユーザは、SSL で暗号化される有効なユーザ名とパスワードを使用

して無線ネットワークにログインできます。Web 認証アカウントはローカルに作成するか、RADIUS サーバで管理できます。Cisco Wireless LAN Controller は Web 認証クライアントをサポートするように設定できます。コントローラで提供される Web 認証ページを置き換えるテンプレートを作成するには、「Web 認証テンプレートの設定」(P.11-52)を参照してください。

-
- ステップ 1** [Configure] > [Controller] の順に選択します。
- ステップ 2** [IP Address] 列で IP アドレス URL をクリックして、Web 認証を有効にするコントローラを選択します。
- ステップ 3** 左側のサイドバーのメニューから [Security] > [Web Auth Configuration] の順に選択します。
- ステップ 4** ドロップダウン メニューから適切な Web 認証の種類を選択します。選択肢は、デフォルトの内部、カスタマイズ Web 認証、または外部です。
- デフォルトの内部を選択する場合、さらにページタイトル、メッセージ、リダイレクト URL、およびロゴを表示するかどうかを変更できます。ステップ 5 に進みます。
 - カスタマイズされた Web 認証を選択する場合は、「カスタマイズされた Web 認証のダウンロード」(P.3-18)に進んでください。
 - 外部を選択する場合は、認証に成功した後でリダイレクトする URL を入力する必要があります。たとえば、このフィールドに入力した値が `http://www.company.com` の場合、ユーザはこの会社のホームページに接続されます。
- ステップ 5** 会社のロゴを表示する場合は、[Logo Display] チェックボックスをクリックします。
- ステップ 6** Web 認証ページに表示するタイトルを入力します。
- ステップ 7** Web 認証ページに表示するメッセージを入力します。
- ステップ 8** 認証に成功した後でユーザがリダイレクトされる URL を指定します。たとえば、このフィールドに入力した値が `http://www.company.com` の場合、ユーザはこの会社のホームページに接続されます。
- ステップ 9** [Save] をクリックします。
-

カスタマイズされた Web 認証のダウンロード

前の項のステップ 4 において、カスタマイズされた Web 認証オプションを選択した場合は、次の手順に従います。カスタマイズ Web 認証ページをコントローラにダウンロードできます。カスタマイズ Web ページは、ユーザ Web アクセス用のユーザ名とパスワードを設定するために作成されます。

カスタマイズ Web 認証をダウンロードする際は、次のガイドラインに従う必要があります。

- ユーザ名を指定する。
- パスワードを指定する。
- リダイレクト URL は、元の URL から引用した後、非表示の入力項目として保持する。
- 操作 URL は、元の URL から引用および設定する。
- 戻りステータス コードをデコードするスクリプトを含める。
- メイン ページで使用されるすべてのパスは相対パスとする。

ダウンロードの前に、次の手順を実行する必要があります。

-
- ステップ 1** プレビュー画像の上でクリックして、サーバからサンプルの `login.html` バンドルをダウンロードします。`login.html` ファイルの例については、図 3-6を参照してください。ダウンロードしたバンドルは .TAR ファイルとなります。

図 3-6 Login.html



ステップ 2 Login.html を開いて編集し、これを .tar または .zip ファイルとして保存します。



(注) 任意のテキストまたは HTML エディタで [Submit] ボタンのテキストを「Accept terms and conditions and Submit」（条件を承諾して送信）と変更できます。

ステップ 3 ダウンロードに Trivial File Transfer Protocol (TFTP) サーバを使用できることを確認します。TFTP サーバをセットアップするときのガイドラインは、次のとおりです。

- サービスポート経由でダウンロードする場合、サービスポートはルーティングできないため、TFTP サーバはサービスポートと同じサブネット上になければなりません。
- ディストリビューションシステムネットワークポート経由でダウンロードする場合、ディストリビューションシステムポートはルーティング可能なので、TFTP サーバはディストリビューションシステムネットワークポートと同じサブネットでも異なるサブネットでもかまいません。
- Cisco WCS の組み込み TFTP サーバとサードパーティの TFTP サーバは同じ通信ポートを使用するため、サードパーティの TFTP サーバは WCS と同じコンピュータ上で実行できません。

ステップ 4 リンク「After editing the HTML you may click [here](#) to redirect to the Download Web Auth Page」の [\[here\]](#) をクリックして、.tar ファイルまたは .zip ファイルをコントローラにダウンロードします。[Download Customized Web Auth Bundle to Controller] ウィンドウが表示されます（図 3-7 を参照）。

図 3-7 カスタマイズ Web 認証バンドルのコントローラへのダウンロード

The screenshot shows the Cisco WCS web interface. The main heading is 'Wireless Control System'. The breadcrumb trail is '20.1.0.160 > Download Customized Web Auth Bundle to Controller'. The page contains the following elements:

- Navigation:** Monitor, Reports, Configure, Location, Administration, Help.
- Controller IP Address Table:**

Controller IP Address	Status
20.1.0.160	NOT_INITIATED
- TFTP Servers:**
 - File is located on: Local machine TFTP server
 - Server Name: Default Server (dropdown)
 - Server IP Address: (text input)
 - Maximum Retries: 10 (text input)
 - Timeout (seconds): 6 (text input)
- WCS Server Files In:**
 - WCS Server Files In: C:\WCS-CONC
 - Local File Name: (text input) [Browse...]
 - Server File Name: (text input)
- Buttons:** OK, Cancel
- Alarm Summary Table:**

Category	Count	Count	Count
Rogue AP	0	134	
Coverage Hole			137
Security	8	0	2
Controllers	1	3	0
Access Points	762	0	39
Mesh Links	0	0	0
Location	1	0	16
- Instructions:**
 - Click [here](#) to download sample tar file.
 - Enter a valid TAR file only with size not exceeding 1MB.
 - You may select to download the Web Auth Bundle in either TAR or ZIP format.



(注) バンドルを受信するコントローラの IP アドレスとその現在のステータスが表示されます。

ステップ 5 [File is Located On] パラメータから [local machine] を選択します。ファイル名および、サーバのルート ディレクトリに対して相対的なパスがわかる場合は、TFTP サーバを選択することもできます。



(注) ローカル マシンのダウンロードには、.zip または .tar のファイル オプションがありますが、WCS では自動的に .zip を .tar に変換します。TFTP サーバのダウンロードを選択した場合は、.tar ファイルだけを指定します。

ステップ 6 [Timeout] パラメータに、ファイルをダウンロードする際、コントローラがタイムアウトするまでの最大時間を秒単位で入力します。

ステップ 7 [WCS Server Files In] パラメータには WCS サーバ ファイルを配置する場所を指定します。そのディレクトリでのローカル ファイル名を指定し、[Browse] ボタンを使用してそのファイル名に移動します。シグニチャ ファイルの「revision」行で、ファイルがシスコ提供の標準のシグニチャ ファイルか、またはサイトに合わせたカスタム シグニチャ ファイルかを指定します (カスタム シグニチャ ファイルには revision=custom が必須)。

ステップ 8 何らかの理由で転送がタイムアウトした場合には、[File Is Located On] パラメータの TFTP サーバ オプションを選択すると、[Server File Name] が読み込まれます。ローカル マシン オプションでは 2 段階の動作が起動されます。まず、ローカル ファイルは管理者のワークステーションから WCS 自体の組み込み TFTP サーバにコピーされます。次にコントローラがそのファイルを取得します。後の動作のため、ファイルはすでに WCS サーバの TFTP ディレクトリに配置され、ここでダウンロード Web ページが自動的にファイル名を読み込みます。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

何らかの理由で転送がタイムアウトした場合には、[File Is Located On] パラメータの TFTP サーバ オプションを選択すると、[Server File Name] が読み込まれます。

ステップ 10 ダウンロードが完了すると、新しいページに接続され、認証できます。

ゲスト WLAN への接続

ゲスト中央 WLAN に接続して Web 認証プロセスを実行する手順は、次のとおりです。ゲスト ユーザ アカウントの詳細については、「[ゲスト ユーザ アカウントの作成](#)」(P.7-11) を参照してください。

- ステップ 1** オープン認証の設定で接続されている場合は、ブラウザで仮想インターフェイスの IP アドレスにアクセスします (/1.1.1.1/login.html など)。
- ステップ 2** WCS ユーザ インターフェイスに [Login] ウィンドウが表示されたら、ユーザ名とパスワードを入力します。



(注) 入力する文字はすべて、大文字と小文字が区別されます。

Lobby Ambassador は、ゲスト ユーザを追加する場合以外は、テンプレートにアクセスできません。

- ステップ 3** [Submit] をクリックして、WCS にログインします。WCS ユーザ インターフェイスは、これでアクティブになり、使用可能になります。[Guest Users Templates] ページが表示されます。このページには作成したすべてのゲスト ユーザ テンプレートの概要が表示されます。



(注) WCS ユーザ インターフェイスを終了するには、ブラウザ ウィンドウを閉じるか、ページの右上の [Logout] をクリックします。WCS ユーザ インターフェイス セッションを終了しても、サーバ上では WCS は終了しません。



(注) WCS セッション中にシステム管理者が WCS を停止すると、セッションが終了し、Web ブラウザに「The page cannot be displayed.」というメッセージが表示されます。サーバが再起動される際に、セッションは WCS に再アソシエートされません。WCS セッションを再開する必要があります。

ゲスト ユーザの削除

ゲスト WLAN とそのアカウントのユーザ名を使用してログインされるクライアント ステーションをすべて削除する手順は、次のとおりです。

- ステップ 1** [Configure] > [Controller Templates] の順に選択します。
- ステップ 2** 左側のサイドバーのメニューから [Security] > [Guest Users] の順に選択します。
- ステップ 3** 削除するユーザ名の前のチェックボックスをクリックします。WCS によって削除前に警告メッセージが表示されます。
- ステップ 4** [Select a command] ドロップダウンメニューから、[Delete Templates] を選択します。削除が完了すると、ウィンドウに削除結果が表示されます。



(注) ゲスト アカウントの有効期限が切れた場合にコントローラによってトラップを呼び出して通知を送信することもできます。WCS はこのトラップを処理し、コントローラの設定からそのゲスト ユーザ アカウントを削除します。

Certificate Signing Request (CSR) の生成

WCS を使用して、サードパーティ製の証明書に Certificate Signing Request (CSR) を生成するには、証明書のアップロード手順について次のマニュアルを参照してください。
http://www.cisco.com/en/US/products/ps6305/products_configuration_example09186a00808a94ca.shtml